

「統合失調症者のリカバリー」についての概念分析

筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻

茨城県立こころの医療センター 佐藤 佑香

筑波大学医学医療系 菅谷 智一

筑波大学医学医療系 森 千鶴

I. はじめに

統合失調症には幻覚や妄想、まとまりのない話などの陽性症状、意欲の低下や感情表現の減少、自閉などの陰性症状、知能や記憶力の低下、やるべきことを計画したり、問題を解決したりする実行機能の低下、感覚情報処理の障害による注意力、記憶力の低下が生じる認知機能障害という3つの大きな症状がある。統合失調症者はこれらの症状により日常生活に支障をきたしたり、対人交流が希薄になったりするため、社会的役割を喪失すると共に自己効力感や自尊感情の低下を招く者が多い。また、自分の人生に対して夢や希望を見失い、絶望を抱くことになり自己実現に向かえない状況となりやすい (Morin・Franck, 2017; 佐藤, 2013; Scotti, 2009; 内野, 2018)。以前は統合失調症の治療について、入院中に病気の症状を消失させてから、元の生活に戻すことに重点が置かれていた (佐藤, 2013; 土屋, 2014)。また、統合失調症者は認知機能が低下しているため、病気について説明しても理解できないという理由から医療職者の指示に従い薬物内服の継続のみが求められていた。さらに行動が制限され、自己決定ができず治療に対して受動的にならざるを得ないことで、退院してもうまく生活できず、再入院を繰り返す回転ドア現象が生じていることが指摘されている (新海・住友, 2018; 田中, 2010)。しかし現在の治療は非定型精神病薬などが開発され、心理社会療法も組み合わせて実施されている。また、疾患に対する捉え方も変化してき

ており、「医療職者が治す」という考えから、「当事者が自分らしく生きる」という目標をもち、前向きに歩むことができるようにという考え方に変化してきている (佐藤, 2008; 土屋, 2014)。

一般的にリカバリーは「回復」を意味し、疾病からの回復、症状や障害が消失し疾病が治ることであり、元に戻ることを意味している。また、身体的な病気や障害からの回復という概念は苦しみが消え、全ての症状が取り除かれ、機能が完全に回復したという意味である。統合失調症者の「リカバリー」は「取り戻す」「再構築」を意味し、どのような病や障害に圧倒されたとしても自分らしさや日常生活、そして自分の人生を取り戻すことができるということを示している。精神科医療におけるリカバリーの概念は、1980年代後半の欧米において精神障害をもつ当事者のリカバリー運動から始まり、1990年代には先進諸国の精神保健政策の根幹に位置付けられるようになった (野中, 2011)。諸外国においてはリカバリー概念についてさまざまな定義がされている。職業リハビリテーションで高名な大学教授の Anthony (1993) はリカバリーについて、「たとえ症状や障害が続いていても希望を抱き、自分の人生に責任をもって、主体的に意味ある人生を生きること」と定義している。またアメリカ合衆国保健福祉省の薬物乱用精神保健管理庁 (SAMHSA) は2006年に「精神保健リカバリーとは、癒しの旅であり、精神保健上の問題をもった人が自分の可能性を実現しようと努力する中で、意味のある人生を送ること

ができるように変化することである」と定義している。これらの定義では当事者の主体性や希望が強調されている。心理学博士で自らも統合失調症者である Deegan (1988 ; 1993) は、「私にとってリカバリーは、自分の人生の運転席に座り続けようとすることです」と述べ、病気ではなく自分で自分の人生をコントロールすること、病気からの回復ではなく、人々の偏見、精神医療からの弊害によってもたらされる障害、自己決定、壊された夢からの回復であることを主張している。これらのことから、精神科医療におけるリカバリーは当事者が主体であることが強調されており、どのような状態をもって「リカバリー」とするかは当事者が自己決定することを重要視していることから、リカバリーは目標ではなくプロセスという捉え方もある。

一方、我が国においては、2003年の日本精神障害者リハビリテーション学会（第11回長崎大会）において「リカバリー」が大会テーマとして掲げられ、欧米諸国におけるリカバリー実践、リカバリー志向の精神保健政策が報告された。しかし、現在までのところ我が国においてはリカバリーの概念は精神保健政策の目標として掲げられていない（田中，2010）。また我が国にリカバリーという言葉が伝わってから15年ほど経っているが十分な検討がされないまま経過しており、定義においても明確に定まっていない（新海・住友，2018）。

このように、リカバリーについては諸外国においてもさまざまな定義が使用されており、一定したものが使用されていない。また、これまでリカバリーは精神障害者全般を含めて捉えられており、統合失調症者に限定したリカバリーについては明確にされていない。「統合失調症者のリカバリー」という概念についてはさまざまな論文で使用されているが、他の精神疾患のリカバリーと同様に捉えられ、未だ明らかにされていないため、「統合失調症者のリカバリー」とはどのようなものか捉えにくい状況にある。そのため、本研究においては、「統合失調症者のリ

カバリー」の概念について分析し、概念の定義づけおよび構造の明確化を行うことで、統合失調症者一人ひとりのリカバリーを目指した医療や支援の質の向上を目指した指針となる提言ができると考えた。

II. 研究目的

本研究は「統合失調症者のリカバリー」についての概念分析を行い、その概念の定義づけおよび構造を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 概念分析の方法

概念分析は、その概念の構造である、属性（その概念が必ず持つ特性であり、属性を文章化することで定義が示されるもの）、先行要件（その概念に先立ち、その現れ方に影響するもの）、帰結（その概念の後に生じるもの）の視点から分析され考察するものである。

本研究では、Rodgers (2000) の手法を用いて概念分析を行った。Rodgers の概念分析は、①関心をよせる概念と、その関連用語の設定、②文献検索し対象・領域の特定、③抽出された文献から概念の属性や先行要件、帰結に関する情報の収集、④収集した情報の分析、⑤概念発展の方向性や仮説などの提示、から構成されている。この方法は、時間や状況の変化に伴う概念の変化に着目し、その概念の特性を明らかにしようとするものである。

2. 明らかにしたい概念

「統合失調症者のリカバリー」という概念は、精神科医療体制や疾患の捉え方の変化などと密接な関係がある。そこで、概念が時間や文化などの背景により多様に変化するものであると捉えるこの手法を用いて行うこととした。

3. 検索対象

文献の抽出は、日本語論文に関しては2019年3月16日から3月20日の期間に医学中央雑誌

Web版にて検索を行った。検索ワードは「統合失調症」「リカバリー」とし、会議録を除外した。英語論文に関しては、2019年4月1日から4月2日の期間にPubMedにて「Schizophrenia」「recovery」を検索ワードとした。いずれも論文の発刊年数については限定しなかった。

4. 分析方法

分析方法は、Rodgersの概念分析の手法にしたがい、概念の属性、先行要件、帰結のそれぞれに該当する記述内容をコーディングシートに抽出し、カテゴリー化を行った。以下、サブカテゴリーを〈 〉、カテゴリーを【 】で示す。さらにカテゴリーの関連性を構造化して概念モデルを作成した(図1)。

IV. 結果

1. 対象となる文献

検索した結果、日本語論文は231件の文献が抽出された。231件の文献のタイトル及び抄録より「統合失調症者のリカバリー」について言及している37件の文献を抽出した。さらに周辺文献の7件の文献を含め、計44件を対象文献とした。また、英語論文に関しては、検索した結果607件の文献が抽出された。607件の文献のタイトル及び抄録より「統合失調症者のリカバリー」について言及している43件の文献を抽出した。さらに周辺文献の16件の文献を含め計59件とした。日本語論文と英語論文を合わせて103件の文献を対象とした。

2. 「統合失調症者のリカバリー」の属性

「統合失調症者のリカバリー」の属性として、【他者に認められる】、【病気をもつ自分を受け入れる】、【役割を求める】、【自己の主体性を実感する】、【理想を描く】の5つのカテゴリーを抽出した(表1)。

カテゴリー【他者に認められる】は、さまざまな対人関係において他者から受け入れられることを通して自分自身の価値を見出し、自分も

他者の力になりたいと思うことを示していた。家族やそれ以外の人々との関わりを持ち、その関わりの中で自分のことを理解し尊重してもらえることである(さまざまな対人関係を築く)、(他者から理解され認められる)、他者から助けを受けるだけでなく、自分も同じような体験をしている他者の力になりたいと思う(他者の力になること)の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

カテゴリー【病気をもつ自分を受け入れる】は、自分の病気や症状を理解し、病気をもちながらも生活する自分に意味があると思うことを示していた。自分の病気や症状を自覚し、それに対して必要な対処法を身につける(病気について自覚する)や(病気に対して対処する)、自分の障害と向き合い、病気を持つ自分を否定せず、自分自身や自分の回復について肯定的にとらえることができる(障害を受け入れる)、(自己を受け入れる)の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

カテゴリー【役割を求める】は、病気があっても自分のなりたい姿や夢、希望を抱き続け、自分の社会で充実した生活を送ることを示していた。病気があっても諦めず自分を高めていく(希望、夢、目標を持つ)、病気をもちながらも今まで自分のことはどうにかやってこられたという(自信を持つ)、他者とのつながりや社会で生活する上での役割を担う(自分には役割があると思える)の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

カテゴリー【自己の主体性を実感する】は、自分の人生は自分のものであると実感することを示していた。自分自身を信じて回復の道を歩んでいくという(自分の可能性を信じる)、自分の治療や生活に対して受動的になるのではなく、主体的に行動する(主体的であること)、自己決定した内容や実際に自分が行ったことに対する責任をもつことである(自分に対する責任)、自分の可能性や目標、体験について他者に伝えることができることである(伝える、発信する)、

表1 属性

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献
	さまざまな対人関係を築く	さまざまな立場の人との出会い、人間関係を広げる	岡本ら 2014；土屋 2014；梶原 2012；Panczak et al 2018
		お互いに相談し支え合う	岩崎ら 2008；小平ら 2018；辻 2018
他者に認められる	他者から理解され認められる	家族の中で役割がある	村井 2018；Yarborough et al 2018
		他者との関わりを通して充実感を得る	丹羽 2018；Lysaker et al 2010
		自分の苦しみを感じ、理解してもらえ 自分の選択や感情を尊重される 自分の価値と存在意義を認められる	梶原 2012；木村 2018；木村ら 2017 木村ら 2016；Norin et al 2017；Pitt et al 2007 岩崎ら 2008
	他者の力になること	他者の力になりたいと思う	岡本ら 2015；木村ら 2018；岡本 2014；小平ら 2018； 磯塚 2015
		ピアサポート活動を行う	磯塚 2015；土屋 2014
病気をもち 自分を受け入れる	病気について自覚する	病気について知り受け止める	村井 2016；藤枝 2018；夏向 2016；木村 2008；梶原 2012；大崎ら 2015；Lysaker et al 2018；MacPherson 2009；内山ら 2010
		自分をとりまく困難な状況を認識する	福嶋ら 2018
		病気になり自分が体験したことを振り返る	梶原 2012；Lysaker et al 2010；土屋 2014；Lysaker et al 2018
		自分の置かれた現状を現実的に認識できる	小平ら 2018；村井 2018；Bonfile et al 2016
		治療・内服の必要性がわかる	夏向 2016；木村 2008；Law et al 2014a；Lysaker et al 2018；Spaniol et al 2002；Dixon et al 2016
	病気に対して対処する	病気により生じることに對する対処法を自分で探し出す	木村 2018
		自分をコントロールできるようになる (自己管理、自己対処能力)	藤枝 2018；丹羽 2018；福嶋ら 2018；吉見ら 2015； Nowak et al 2017；Bonfile et al 2016；Barut et al 2018；Freese et al 2009；Hann et al 2013；Whitley 2014；Bellack 2008；Rosen et al 2014；Siu et al 2012
	障害を受け入れる	障害に対して向き合う	Norin et al 2017；地應ら 2015；福嶋ら 2018
		病気を受容する	村井 2016；内野 2018；小平ら 2018；岡本ら 2014； Nowak et al 2017
	自己を受け入れる	精神疾患を自分のすべてではなく、一部として受け止める ことができること	岡本ら 2014
		病気になったことを否定せず、病気である自分でも良いと 思う	Spaniol et al 2002
	希望、夢、目標を持つ	今までの自分を肯定することができる	木村 2016；土屋 2014；村井 2018；Freese et al 2009； Nowak et al 2017；Lysaker et al 2010
		セルフスティグマの軽減 自分が回復することを信じている	Yanos et al 2008；村井 2018 岡本ら 2015；磯塚 2015；Hann et al 2013
	役割を求める	病気があっても諦めずに自分のなりたい姿、希望、夢を持 ち続ける	岡本 2015；Lysaker et al 2010；内山ら 2010；内野 2018；丹羽 2018；藤中 2018；野中 2011；菊山 2008； Bonfile et al 2018；Barut et al 2016；Law et al 2014a；Yanos et al 2008；Scotti 2009；Siu et al 2012
		もっと自分を高めたいと思う	土屋 2014；大崎ら 2015；Barut et al 2016；小平ら 2018；内山ら 2010
	自分の可能性を信じる	自らの成長のための課題を設定する	山口ら 2017；辻 2018；木村ら 2017；Lysaker et al 2018；Kern et al 2009；Barut et al 2016；大崎ら 2015
		現実的な希望を持つ 目標、夢、希望について語る	地應 2014；Yanos et al 2008；山口ら 2017；辻 2018 Nyers 2010
	自己の主体性を 実感する	自信を持つ (病気を克服してきた、これからも やっていける)	木村 2018；菊山 2008；Spaniol et al 2002；藤中 2018；木村ら 2017；大崎ら 2015；内野 2018 木村ら 2016
		自分には役割があると思える (他者とのつながり、社会で生活す る役割を担う)	内野ら 2018；丹羽ら 2012 Barut et al 2018；岡本ら 2015；Panczak et al 2018； Drake et al 2014；Whitley 2014；MacPherson 2009 Davidson et al 2008
	自分の可能性を信じる	自分のコミュニティに参加するという願望を持つ	Siu et al 2012；Greenberg et al 2008
		病院ではなく社会でうまく機能する 他者とのつながりをもつ	Thomas et al 2018b；Kanehara et al 2017
	主体的であること、自己決定	自分は回復するという可能性を信じている	土屋 2014；Panczak et al 2018；渡邊ら 2018；木村ら 2017
		自分の人生は自分で切り開いていく 自分の可能性を信じる	土屋 2014 Kern et al 2009
	自分のすべきことを考える	治療について自分の意見をいうことができる	木村 2008；藤枝 2018；Kern et al 2017；Law et al 2014a；Dixon et al 2016
		自らの生活を主体的に決める	山口ら 2017；内野 2018；吉見ら 2015；Norin et al 2017；Freese et al 2009；Whitley 2014；Rosen et al 2014；chiba et al 2010；成田ら 2017
	自分に対する責任	受動的ではなく自己決定すること	岡本ら 2015；Bellack 2008；Nyers 2010；岩崎ら 2008；山口ら 2017；地應ら 2015；藤枝 2018；吉見ら 2015；Chorzynska et al 2015；Davidson et al 2008； Rosen et al 2014
		意思決定においてもその人らしきを持つ	藤枝 2018
	伝える、発信する	自分が決めたことに責任をもって行動する	内野 2018；大崎ら 2015；Nowak et al 2017；Whitley 2014；Davidson et al 2008；Lysaker et al 2010；山 口ら 2017；chiba et al 2010 成田ら 2017
		新たな役割やコミュニティで責任をもつ	Andresen et al 2003；Andresen 2007
	一人の人間として 自分の人生を生きる	自分の人生に責任を持つ	山口ら 2017
		過去の体験を語るができる	大崎ら 2015；夏向 2016
	自分がどのようになりたいか 考える	自分の人生は自分で切り開いていく	土屋 2014
		自分らしく生きる、自分の人生を生きる	岩崎ら 2008；木村 2008；梶原 2012；Barut et al 2018；Yarborough et al 2018
	理想を描く	一人の人間としてどのように生きたいのが考え努力する	岡本ら 2015；丹羽ら 2012；藤枝 2018
		自分らしさを大事にする	岡本 2014；岩崎ら 2008；内野 2018；Panczak et al 2018；Fleischhacker et al 2014
	自分の能力を生かす	患者ではない自分になる	Nowak et al 2017；Barut et al 2018；Yarborough et al 2018；Lysaker et al 2010；MacPherson 2009；Siu et al 2012
		自己意識の向上	Bonfile et al 2016；Lysaker et al 2018；Spaniol et al 2002
	変化を自覚する	自分がもつ力や良い点を生かす(ストレス)	内山ら 2010；Fleischhacker et al 2014；藤中 2018； 小平ら 2018；Freese et al 2009；MacPherson 2009； Scotti 2009；Greenberg et al 2008；Nowak et al 2017；Bellack 2008
		ストレス(自分の能力)に気づき自覚することができる	夏向 2016；梶原 2012；菊山 2008；福嶋ら 2018； Chorzynska et al 2015；渡邊ら 2015
	自分のすべきことを考える	自分の良い面に目を向け、自分に自信をもつ	渡邊ら 2018；木村 2008；成田ら 2017；Kao et al 2017
		病気がなったことを否定的に捉えるのではなく、バネにし て新たな生き方考える	岩崎ら 2008；Panczak et al 2018；岡本 2014
	経験を積む	病気とは違う別の自己感覚を持つ	Bellack 2008；Hann et al 2013；地應 2014
		自分の経験を通して学んだことに気が付く	Thomas et al 2018b
	経験を積む	障害に圧倒され、障害と闘っていた私から、障害を越えて 前向きに生きようとし始める私へ変化する	菊山 2008
		自分の目標に対して自分でできそうなことを考えスモール ステップでたてる	内山ら 2010；土屋 2014；Lysaker et al 2010； MacPherson 2009
	経験を積む	目標を自分で決める	内野 2008
		自分なりの生活を見出していく(どのように病気と折り合 いをつけ、いかに受け入れて生きていくか)	地應ら 2015
	経験を積む	自分なりの回復への道を進む	Bellack 2008；MacPherson 2009；木村 2008
		目標達成のために現実の問題を検討する	夏向 2016；内野 2008；菊山 2008
	経験を積む	うまくいかない経験をする	木村 2018；内野 2018；木村ら 2018；Barut et al 2018；Bellack 2008；Nyers 2010
		小さなステップを踏んで学んでいく、新たな体験を積み重 ねる	内野 2018；藤中 2018
	経験を積む	プラスのフィードバックをうける	内野 2008
		挑戦し続けること	地應 2014；小平ら 2018

自分の人生は自分で切り拓いていき、自分らしく生きることである〈一人の人間として自分の人生を生きる〉という5つのサブカテゴリーで構成されていた。

カテゴリー【理想を描く】は、自分の強みも弱みも受け入れ、試行錯誤しながら、自分の理想を求めることを示していた。患者ではなく自分が一人の人間としてどのように生きたいかを考える〈自分がどうなりたいたいのかを考える〉、自分の良い面に気づきそれを生かす〈自分の能力を生かす〉、病気になった当初は病気に圧倒されていた自分から、その経験を糧として新しい自分へと変化していることへの気づきである〈変化を自覚する〉、自分なりの生活を送るための目標やそれに向けての課題設定をする〈自分のすべきことを考える〉、うまくいかない経験も含めてさまざまなことに挑戦し、経験を積み重ねていくことである〈経験する〉の5つのサブカテゴリーで構成されていた。

3. 「統合失調症者のリカバリー」の先行要件

統合失調症者のリカバリーの先行要件として【病気による衝撃】、【再トラウマ体験】の2つのカテゴリーを抽出した(表2)。

カテゴリー【病気による衝撃】は、病気にな

表2 先行要件

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献
病気による衝撃	苦悩	挫折感	内野 2018 : 浜中 2018 : 小平ら 2018 : Morin et al 2017
		絶望・失望	池淵 2014 : Lysaker et al 2009 : Andresen et al 2003 : Yarborough et al 2016
		無力感	池淵 2014 : Frese et al 2009 : Kern et al 2009 : Yanos et al 2008 : 佐藤ら 2013 : Scotti 2009
		諦め	樋端 2015 : 山口ら 2017
		孤立感	熊倉 2016 : 福嶋ら 2018 : Barut et al 2017 : Kern et al 2009
		病気になったことを自分のせいだと思う 今までと同じようにできない苦悩	Scotti 2009 Deegan 1988
	喪失体験	セルフスティグマ	岡本ら 2015 : 佐藤 2013 : 大崎ら 2015 : Bonfilset al 2016 : Yarborough et al 2016 : Lysaker et al 2010 : Yanos et al 2008 : Thomas et al 2016a : Anthony 1993
		尊厳の喪失	Yarborough et al 2016
		自律性の低下	木村ら 2017 : 成田ら 2017
		夢・希望の喪失	MacPherson 2009 : 成田ら 2017 : Deegan 1988
周囲との関係の希薄化	自信の喪失	藤枝 2018 : 丹羽 2018 : 山口ら 2017 : Morin et al 2017	
	自己決定権の喪失	Yarborough et al 2016 : Anthony 1993	
	学校、仕事などの中断・失業	Bellack 2006 : Pitt et al 2007	
	社会的役割の喪失	Spaniol et al 2002 : Myers 2010 : Yarborough et al 2016	
過保護	地域生活で感じる孤独と困難	成田ら 2017	
	先取り行為、失敗させない	岡本ら 2015 : 渡邊ら 2018 : 辻 2018 : 小平ら 2018	
	病院で安定していれば良いという考え方 管理志向	岡本ら 2015 : Fleischhacker et al 2014 岩崎ら 2008 : 吉見ら 2015 : Frese et al 2009	
再トラウマ体験	拒否	周囲の偏見やスティグマ	成田ら 2017 : 岡本ら 2018 : 内野 2018 : 内野ら 2019 : 佐藤 2013 : 池淵 2014 : Frese et al 2009 : Fleischhacker et al 2014 : Bellack 2006 : Rosen et al 2014 : Myers 2010 : Dixon et al 2016 : Jacobson et al 2001 : Pitt et al 2007 : Burgess et al 2010 : Lysaker et al 2010 : Thomas et al 2016a
		疎外される	Barut et al 2016 : Bellack 2018 : Pitt et al 2007
		家族からの拒否	吉見ら 2015
		屈辱的な経験	Frese et al 2009

ったことにより統合失調症者が感じる体験を示しており、病気になったことにより絶望や孤独などの〈苦悩〉、病気になったことによって生じる〈喪失体験〉、病気によってそれまで所属していた社会などとの関係性が希薄になってしまう〈周囲との関係の希薄化〉であった。

カテゴリー【再トラウマ体験】は2つのサブカテゴリーから構成されており、病気になったことの衝撃に加え、さらに病気に打ちのめされている統合失調症者の回復を阻害する要因となる周囲の人々の態度を示していた。医療者を始めとした周囲の人々が統合失調症者は病院で安定して生活することだけを目標として考え、当事者には何もさせず、その人の治療や生活を周囲が管理しようとする体制をとる〈過保護〉、病気になった当事者に対する偏見や拒否的な態度により拒絶しようとする〈拒否〉であった。

4. 「統合失調症者のリカバリー」の帰結

統合失調症者のリカバリーの帰結として【自己実現】の1つのカテゴリーが抽出された(表3)。

カテゴリー【自己実現】は、サブカテゴリー〈新たな道へ〉、〈生活の意味〉、〈充実感と自信〉、

表3 帰結

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献
新たな道へ		新たな自己を想像し、次のステップへ向かって行動する	夏莉 2016；浜中 2018；木村 2016；大崎ら 2015；辻 2018；成田ら 2017；Thomas et al 2016a
		さらに自分をコントロールして新しい自分になる	木村 2016；岡本ら 2014；小平ら 2018
		新たな生き方に喜びや生きがいを見出そうとする	池淵 2014；Yanos et al 2008
		もっと自分を高め、これからはより良いものにしたいと思う	Pitt et al 2007；Corrigan et al 1999；土屋 2014
		自分の人生について意味付けをする	Hamm et al 2013；Jacobson et al 2001；Bjornestad et al 2018；Kanehira et al 2017；Morin et al 2017
		時には後退しながらも、さまざまなことに挑戦し続け成長する	Bellack 2006；池淵 2014；小平ら 2018
自己実現	生活の意味	希望を持った、自分にとって意味のある生活を送る	木村ら 2017；Scotti 2009；丹羽ら 2012；Panczak et al 2016；Kern et al 2009；Essock et al 2009；Yarborough et al 2016；Thomas et al 2016b；Myers 2010；Davidson et al 2008
		趣味や興味のあることを再び行う	Yarborough et al 2016
	充実感と自信	社会的なつながりの再構築	Bellack 2006；Scotti 2009；Pitt et al 2007
		再発率の低下、再入院率の低下	Jääskeläinen et al 2013；千葉 2016；Myers 2010；木村 2008；Pitt et al 2007；Kern et al 2009
周囲への影響		自分の人生の満足度が上がる	佐藤 2013；Zipursky et al 2015；Greenberg et al 2006
		困難を乗り越えたという誇りと自信	小平ら 2018；福嶋ら 2018；Corrigan 1999
		自分自身を尊ぶことができる	Yarborough et al 2016；Scotti 2009
周囲への影響		自尊心の向上	熊倉 2016；Charzynska et al 2015；Panczak et al 2016；Barut et al 2016；Lysaker et al 2010；Spaniol et al 2002；Pitt et al 2007；Corrigan 1999；Law et al 2014
		自己効力感の向上	熊倉 2016；福嶋ら 2018；吉見ら 2015；Thomas et al 2016a；Davidson et al 2008
		周囲の障害理解が深まる	岡本 2014
		周囲のスティグマを軽減する	Panczak et al 2016；Fujimoto 2016
周囲への影響		他の患者や家族の希望となり、回復を促すロールモデルとなる	土屋 2014；小平ら 2018；木村ら 2017；Fleischhacker et al 2014；Deegan 1988；樋端 2015；池淵ら 2015
		社会システムの変化を促す	Nowak et al 2017

〈周囲への影響〉で構成されていた。統合失調症者がリカバリーを進めていくことで、これまでの自分自身の人生に意味付けすることや今よりさらに人生を良いものにしていきたいと思う〈新たな道へ〉、ただ生活するのではなく意味のある生活を送ることや病気によって失っていた社会的なつながりの再構築を行う〈生活の意味〉、病気によっておこったさまざまな困難を乗り越えてきたことに対する自信や満足感、病気を持つ自分でもなんとかやっていけるという自己効力感や自尊感情の向上である〈充実感と自信〉であった。また、当事者自身への影響だけでなく〈周囲への影響〉の内容も抽出され、当事者が回復することで周囲の統合失調症への理解が深まり偏見が軽減することや、同じ病気で苦しんでいる統合失調症者やその家族に対する希望となることが示された。

5. 統合失調症者がリカバリーに向かい、それを促進する原動力となるもの

「統合失調症者のリカバリー」についての概念分析の結果、統合失調症者のリカバリーのためには、先行要件が属性に向かうための原動力が必要であることが明らかとなった。リカバリ

ーが進んでいくために原動力となるものとして【ストレングス】、【周囲の資源】の2つのカテゴリーを抽出した（表4）。

カテゴリー【ストレングス】は、統合失調症者本人にもともと備わっている健康的な側面であり、リカバリーが促進されるものを示していた。文化的価値観など自分もつ信念や、自分にもできることがあると思う自己効力感や自己肯定感などの〈信じるもの〉、基本的な生活能力や趣味や余暇を楽しむ能力、健康的な感情などともと本人が持つ力を示す〈底に秘めた力〉があった。また、病気に対して諦めず希望を抱く気持ちや病気のこととはなんとかできるという楽観視することや自己信頼を示す〈勇気〉、自分の病気について振り返り、病気やその困りごと、病気の経験を話すことができること、回復できると信じて病気に向かうこと、必要な援助を求める力である〈病気に対する態度〉があり、全部で4つのサブカテゴリーで構成されていた。

カテゴリー【周囲の資源】は、先行要件から属性に向かうきっかけになるものや、リカバリーを促進させるものを示していた。安心して暮らす場所や社会的な役割などの〈役割・居場所〉、家族や専門家の支援、病気を受け入れ回復を促

進する社会資源などの〈保護的な環境〉という統合失調症者が置かれる環境があった。また、自分の病気を理解し、自分の強みに気づかせ常に一緒に物事を考え支えてくれる存在や同じ体験をしたピアサポートの存在である〈重要他者の存在〉、医療者中心ではなく統合失調症者を中心にし、共に治療の選択や決定を行ったり、病気の面だけでなく健康的な面も見て本人の回復

を信じて常にエンパワメントし続ける〈医療者の態度〉があり、4つのサブカテゴリーで構成されていた。

6. 概念の定義

概念分析の結果、統合失調症者のリカバリーを以下のように定義した。

統合失調症者のリカバリーは、「他者に認めら

表4 原動力となるもの

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献
信じるもの	自己肯定感		浜中 2018
	自己効力感		熊倉 2016; 福嶋ら 2018; Ralth et al 2000
	文化的価値観		Kao et al 2017; Dixon et al 2016; Chiba et al 2010; Nowak et al 2017; Barut et al 2016; Spaniol et al 2002
	身体的な健康		福嶋ら 2018; Lysaker et al 2010
	健康的な生活習慣		Nowak et al 2017
	趣味や楽しみがある、余暇を楽しむ能力		安喰ら 2015
	基本的会話技能、セルフケア能力		内野ら 2018; 辻 2018; Morin et al 2017; Frese et al 2009; MacPherson 2009; 安喰ら 2015
	底に秘めた力		丹羽 2018; 成田ら 2017; Bonfils et al 2016; Kao et al 2017; Hamm et al 2013; Lysaker et al 2018; Lysaker et al 2010
	メタ認知		Ralth et al 2000
	ストレングス	健康的な感情	
楽観主義			岡本 2014
病気があってもあきらめない気持ち			内野ら 2018
希望を喚起することができること			大崎ら 2015; 熊倉 2016; Ralth et al 2000; 木村 2016
病気に対する態度	自己信頼		木村 2016
	自分の病気や困りごと、経験について語ることができる		木村 2008; 梶原 2012
	病気を振り返る		樋端 2015; Morin et al 2017; Thomas et al 2016b; Deegan 1998
	回復できると信じる		MacPherson 2009
	病気に向かう決意		熊倉 2016; 福嶋ら 2018; Law et al 2014; Davidson et al 2011; Ralth et al 2000
役割・居場所	援助を求める力		辻 2018; Myers 2010
	安心して暮らす場所		福嶋ら 2018; Charzynska et al 2015; Panczak et al 2016; MacPherson 2009; Essock et al 2009
	就労すること		村井 2016
	家族内での役割		村井 2016; 木村 2008; 内野 2008; 野中 2011; 池淵 2014; Morin et al 2017
保護的な環境	家族のサポート		成田ら 2017; 夏莉 2016; Whitley 2014
	専門的支援		浜中 2018
	孤立・孤独を防ぐ		Deegan 1998; Bellack 2006
	病気に対する社会の受け入れ		浜中 2018; Law et al 2014; 樋端 2015; 成田ら 2017
	回復促進する社会資源		Bjornestad et al 2018
周囲の資源	自分を理解してくれる存在		木村 2016; 岡本 2014; 大崎ら 2015; 丹羽 2018; 木村ら 2017; 池淵 2015; 小平ら 2018; 吉見ら 2015; Hamm et al 2013; Thomas et al 2016a; MacPherson 2009; Greenberg et al 2006; Bjornestad et al 2018; Essock et al 2009; Jacobson et al 2001; Law et al 2014
	さまざまな立場の人と関係を作る		渡邊ら 2018; 浜中 2018; 内野 2008; 梶原 2012; 木村ら 2017
	安心・安全・サポートティブ・強みに気づけるように関わってくれる存在		木村 2016; 内野 2018; 岩崎ら 2008; 木村 2008; 山口ら 2017; 大崎ら 2018; Frese et al 2009; Fleischhacker et al 2014; Spaniol et al 2002; Thomas et al 2016b; Dixon et al 2016; Siu et al 2012; Jacobson et al 2001; Pitt et al 2007
	重要他者の存在		千葉 2016; 浜中 2018; 梶原 2012
	ピアサポートの体験を知る		木村 2016
	自分は一人ではないと思える体験		渡辺ら 2018; 浜中 2018; 内野 2008; 土屋 2014; 木村ら 2017; 大崎ら 2015
	自分のことを一緒に考えてくれる人の存在		丹羽 2018; 熊倉 2016; Charzynska et al 2015; Davidson et al 2008
	プラスのフィードバックをしてくれる		岡本ら 2015; 辻 2018; Nowak et al 2011; Law et al 2014; 丹羽 2018; 熊倉 2016; 吉見ら 2015
	主体性・主体的参加の尊重		小平 2018; 木村ら 2017; Nowak et al 2017; Lysaker et al 2010; Bellack 2006; Greenberg et al 2006
	意欲・動機付けをしてくれる		野中 2011; Scotti 2009; Anthony 1993; 夏莉 2014; 村井 2016; Law et al 2014; Lysaker et al 2018; Dixon et al 2016; Kanehara 2017; Neil et al 2009
医療者の態度	病気の面ではなく健康的な面をみる		山口ら 2017; 熊倉 2016; Rosen et al 2014; Jacobson et al 2001
	当事者の回復を信じていること・信じた対応		Frese et al 2009; Bellack 2006; 熊倉 2016
	共に治療を選択・決定する		Nowak et al 2017; Yarborough et al 2016; Dixon et al 2016; 山口ら 2017
	エンパワメントする		Dixon et al 2016; 熊倉 2016
	柔軟で個別化した対応		樋端 2015; 木村 2008; 梶原 2012; 辻 2018; 野中 2011; 大崎ら 2015; Law et al 2014; Pitt et al 2007; 丹羽ら 2012
当事者中心			
一緒に解決しようとするサポート体制			

れる体験を通して、病気を持つ自分を受け入れ、役割を求め、自己の主体性を実感しながら理想を描いていくプロセス」と定義した。

リカバリーは変化のプロセスとして捉えられており、一直線上に進むのではなく行きつ戻りつしながら進んでいく特徴があることから、さまざまな要素が複雑に関連し合っただと進んでいくと考えられる。そのため、統合失調症者のリカバリーにおいても、5つの構成要素が相互に影響しながら、その人のリカバリーを形成していくことが考えられた。

VI. 考察

1. 概念の特徴

統合失調症者の多くは、病気になったことにより、挫折感や絶望を抱き、病気やその症状により自分の夢や希望、自己決定権の機会の喪失など多くの喪失体験をしている。これらの体験に加え、統合失調症者に対しては周囲からの偏見も強く差別的な体験も多くしていくことでセルフスティグマが強く形成される傾向にある。そのため、適切な対応がとられないと不安や抑うつ、混乱などをきたし、依存傾向やひきこも

り傾向になることが指摘されており、リカバリーが進みにくい困難な状況にある(池淵, 2014; Yarborough・Yarborough・Janoff・Green, 2016)。

リカバリーは統合失調症者自身が自分の生活に対して夢や目標を持ち、主体的に自己選択、自己決定を行っていくことが原則となっている。しかし我が国も含め、病院で安定することを目標とすることで管理を強化する態度、病気を中心として考え、その人を中心に見ていない態度、失敗やトラブルを避けるための過剰な保護的な態度が多く認められている(Fleischhacker et al., 2014; 岡本・広沢・四方田・松本, 2015; 吉見・加藤・平安, 2015)。また医療職者は統合失調症者を無力で何も行えない人ととらえ、先取り行為や代理行為を行い、統合失調症者のリカバリーを阻んでいることが指摘されている(Frese et al., 2009; 小平・丹羽・いとう, 2018; 岡本ら, 2015; 辻, 2018; 吉見ら 2015; 渡邊・池淵, 2018)。また日本の文化的背景として、自律より調和を重んじる傾向にあり、そのために統合失調症者の自己選択や自己決定、自己責任の機会を奪ってしまい、個別に応じたりカバリ

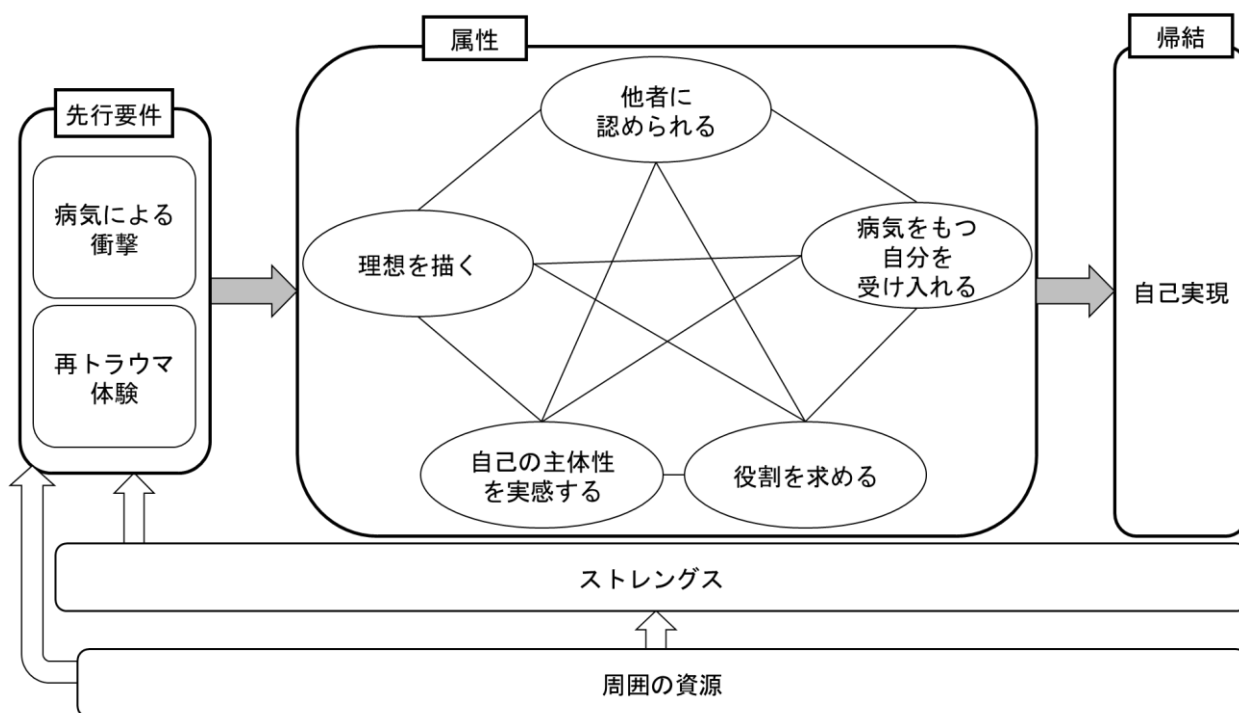


図1 概念モデル

一を果たすことが困難な状況が多く認められる(宇田川, 2008)。しかし、近年我が国でも精神障害者全体の脱施設化が促され、地域での生活が中心となり在宅療養に移行してきており、リカバリーの考え方も取り入れられるようになった(大崎・大西・大井, 2015)。症状や障害に焦点を当て、それをいかに少なくするかという視点ではなく、人生の意味、目的、成功、満足などの本人がもつ健康的な側面を増やしていくことが重要である(内山ら, 2010)。

リカバリーを促進していくうえでその人の健康的な側面であるストレングスは重要な概念であるとされている(Ridgway, 2001)。本研究においてもストレングスに対して目を向けることの重要性が示唆された。Deegan (2006) は、人は皆ストレングスを持ち、その人の弱みや困難でさえもストレングスに変化させることができると述べている(Deegan・Drake, 2006)。ストレングスに目を向けて関わることでその人自身が本来もつ能力を発揮し、自己効力感が向上することで、これからの自分の人生を前向きにとらえて行動することにつながる(天谷ら, 2008; 塩見・畦地, 2016)。しかし、統合失調症者は認知機能の低下に加え、スティグマなどによりストレングスに気づきにくいいため、医療者をはじめとする周囲の人々が意識して本人のストレングスに目を向けることが重要であると考える。統合失調症者がもつ弱みを強みに変えること、強みを引き出し生かしていく支援を行うことで、統合失調症者のリカバリーを促進させていくことができる。また、そのリカバリーを促進するためには、さまざまな選択や決定を行う必要がある。医療者を含む周囲の人々が、その統合失調症者の置かれている状況を理解し、本人の主体性を大事にしながら、その人が自分の夢や目標に向かって歩いていけるように、常に寄り添いサポートしていく存在になることが重要である。統合失調症者のリカバリーはその本人の努力に加え、周囲の存在があつてこそ促進されることが明確になった。

2. 概念の臨床における有用性

「統合失調症者のリカバリー」の帰結として「自己実現」というカテゴリーが抽出され、リカバリーが進むにつれて、統合失調症者が意味ある生活をすることや、自分に自信を持つことでさらに自己実現に向かおうとすること、統合失調症者自身だけでなく周囲へも良い影響を与えることが示唆された。また、統合失調症者のリカバリーの原動力となるものとして「ストレングス」と「周囲の資源」が抽出され、統合失調症者のリカバリーを促進させるために必要な看護の視点や具体的な看護実践の方法が明確になったと同時にそれらの重要性が示された。

Ⅶ. 結論

「統合失調症者のリカバリー」について 103 件の文献から概念分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 「統合失調症者のリカバリー」の概念の属性は、【他者に認められる】、【病気をもつ自分を受け入れる】、【役割を求める】、【自己の主体性を実感する】、【理想を描く】が抽出された。したがって「統合失調症者のリカバリー」は「他者に認められる体験を通して、病気を持つ自分を受け入れ、役割を求め、自己の主体性を実感しながら理想を描いていくプロセス」と定義された。
2. 「統合失調症者のリカバリー」の概念の先行要件には、【病気による衝撃】、【再トラウマ体験】があり、概念の帰結は【自己実現】が抽出された。

謝辞

本論文の英語校正・校閲をいただいた Flaminia 先生に深く感謝申し上げます。

文献

天谷真奈美・鈴木麻揚・柴田文江・阿部由香・田中留伊・大迫哲也・板山稔(2008) 統合失

- 調症者の社会参加自己効力感を促進する要因, *J Nurs Studies NCNJ* Vol, 7(1), 1-7.
- Andresen, R. (2007) The experiences of recovery from schizophrenia: development of a definition, model and measure of recovery. *University of Wollongong Thesis Collection*, 1954-2016, 1-216.
- Andresen, R., Oades, L., Caputi, P. (2003) The experience of recovery from schizophrenia: towards an empirically validated stage model. *Australian & New Zealand Journal of Psychiatry*, 37(5), 586-594.
- 安喰智美, 堀内聡 (2015) 統合失調症患者のリカバリーに関連する心理社会的要因の検討, *精神障害とリハビリテーション*, 19(2), 203-209.
- Anthony, W. (1993) Recovery from mental illness: the guiding vision of the mental health service system in the 1990s. *Psychosocial rehabilitation journal*, 16(4), 11-23.
- Barut JK, Dietrich MS, Zanoni PA, Ridner SH. (2016) Sense of belonging and hope in the lives of persons with schizophrenia. *Archives of psychiatric nursing*, 30(2), 178-184.
- Bellack, A. S. (2006) Scientific and consumer models of recovery in schizophrenia: concordance, contrasts, and implications. *Schizophrenia Bulletin*, 32(3), 432-442.
- Bjornestad, J., Veseth, M., Davidson, L., Joa, I., Johannessen, J. O., Larsen, T. K., ... & Hegelstad, W. T. V. (2018) Psychotherapy in psychosis: Experiences of fully recovered service users. *Frontiers in psychology*, 9, 1-7.
- Bonfils, K. A., Luther, L., George, S., Buck, K. D., Lysaker, P. H. (2016) The role of metacognitive self-reflectivity in emotional awareness and subjective indices of recovery in schizophrenia. *The Journal of nervous and mental disease*, 204(12), 903-908.
- Burgess, P., Pirkis, J., Coombs, T., Rosen, A., Australian, A. J. (2010) Australian Mental Health Outcomes and Classification Network 'Sharing Information to Improve Outcomes' An Australian Government funded initiative Review of Recovery Measures. *National mental health strategy*, 1-78.
- Charzynska, K., Kucharska, K., Mortimer, A. (2015) Does employment promote the process of recovery from schizophrenia? A review of the existing evidence. *International Journal of Occupational Medicine and Environmental Health*, 28(3), 407-418.
- 千葉大介 (2016) 当事者の立場から統合失調症をリカバリーする (特集 リカバリーをめざした統合失調症治療), *日本医事新報*, 4822, 37-41.
- Chiba, R., Miyamoto, Y., Kawakami, N. (2010) Reliability and validity of the Japanese version of the Recovery Assessment Scale (RAS) for people with chronic mental illness: scale development. *International journal of nursing studies*, 47(3), 314-322.
- Corrigan, P. W., Giffort, D., Rashid, F., Leary, M., Okeke, I. (1999) Recovery as a psychological construct. *Community mental health journal*, 35(3), 231-239.
- Davidson, L., Schmutte, T., Dinzeo, T., Andres-Hyman, R. (2007) Remission and recovery in schizophrenia: practitioner and patient perspectives. *Schizophrenia Bulletin*, 34(1), 5-8.
- Deegan, P. E. (1988) Recovery: The lived experience of rehabilitation. *Psychosocial rehabilitation journal*, 11(4), 11-19.

- Deegan, P. (1993) Recovering our sense of value after being labeled: Mentally ill. *Journal of psychosocial nursing and mental health services*, 31(4), 7-9.
- Deegan, P., Drake, R. (2006) Shared decision making and medication management in the recovery process. *Psychiatric services*, 57(11), 1636-1639.
- Dixon, L. B., Holoshitz, Y., Nossel, I. (2016) Treatment engagement of individuals experiencing mental illness: review and update. *World Psychiatry*, 15(1), 13-20.
- Drake, R. E., Whitley, R. (2014) Recovery and severe mental illness: description and analysis. *The Canadian Journal of Psychiatry*, 59(5), 236-242.
- Essock, S., Sederer, L. (2009) Understanding and measuring recovery. *Schizophrenia bulletin*, 35(2), 279-281.
- Fleischhacker, W. W., Arango, C., Arteel, P., Barnes, T. R., Carpenter, W., Duckworth, K., ... & Moller, M. (2014) Schizophrenia-time to commit to policy change. *Schizophrenia bulletin*, 40(3), S165-S194.
- Frese III, F. J., Knight, E. L., Saks, E. (2009) Recovery from schizophrenia: With views of psychiatrists, psychologists, and others diagnosed with this disorder. *Schizophrenia bulletin*, 35(2), 370-380.
- 藤枝由美子 (2018) 症状自己対処、WRAP などの自己対処—主体的な人生のために自己対処について学ぶ—, 精神科臨床サービス, 18(2), 187-191.
- Fujimoto, Y, Fujino, Y, Matsuura, E, Kusuba, Y. (2016) Correlation Between the Recovery Level and Background Factors of Schizophrenics in the Community, 日本健康医学会雑誌, 25(4), 335-339.
- 福嶋美貴・伊藤俊弘・長谷川博亮 (2018) 安定した地域生活を継続している統合失調症をもつ者のリカバリーの特徴と関連要因. 精神障害とリハビリテーション, 22(1), 61-67.
- Greenberg, J. S., Knudsen, K. J., Aschbrenner, K. A. (2006) A memorial tribute: Prosocial family processes and the quality of life of persons with schizophrenia. *Psychiatric Services*, 57(12), 1771-1777.
- 浜中利保 (2018) 一人ひとりがりカバリーしていくステップとなるデイケアを目指して: 個々のためのグループ活動を創造・運営, アウトリーチでデイケアの入り口と出口を丁寧に (特集 精神科デイケアの行方), 精神医療 第4次, 89, 73-80.
- Hamm, J. A., Hasson-Ohayon, I., Kukla, M., Lysaker, P. H. (2013) Individual psychotherapy for schizophrenia: Trends and developments in the wake of the recovery movement. *Psychology Research and Behavior Management*, 6, 45.
- 池淵恵美 (2014) リカバリーにはたす希望の役割, 臨床精神医学, 43(4), 535-543.
- 池淵恵美・村井俊哉・笠井清登 (2015) 座談会 統合失調症治療の未来: 人生もこころも脳もリカバリー (創刊 30 周年記念増大号)-- (統合失調症治療の現在), こころの科学, 180, 2-21.
- 岩崎弥生, 野崎章子, 松岡純子, 水信早紀子 (2008) 地域で生活する精神障害をもつ当事者の視点から見たリカバリー～グループ・インタビュー調査の質的分析をとおして～, 病院・地域精神医学, 50 (2), 53-55.
- Jääskeläinen, E., Juola, P., Hirvonen, N., McGrath, J. J., Saha, S., Isohanni, M., ... & Miettunen, J. (2012) A systematic review and meta-analysis of recovery in schizophrenia. *Schizophrenia bulletin*, 39(6), 1296-1306.
- Jacobson, N., Greenley, D. (2001) What is recovery? A conceptual model and explication. *Psychiatric services*, 52(4),

- 482-485.
- 梶原雅史 (2012) 福岡病院救急病棟: リカバリー志向の心理教育について (特集 統合失調症の看護から患者のセルフケアについて考える)--(心理教育の実際), *臨床看護*, **38**(9), 1237-1240.
- Kanehara, A., Kotake, R., Miyamoto, Y., Kumakura, Y., Morita, K., Ishiura, T., ... & Kasai, K. (2017) The Japanese version of the questionnaire about the process of recovery: development and validity and reliability testing. *BMC psychiatry*, **17**(1), 1-11.
- Kao, Y. C., Lien, Y. J., Chang, H. A., Tzeng, N. S., Yeh, C. B., Loh, C. H. (2017) Stigma resistance in stable schizophrenia: the relative contributions of stereotype endorsement, self-reflection, self-esteem, and coping styles. *The Canadian Journal of Psychiatry*, **62**(10), 735-744.
- 荻山和生 (2008) リカバリー志向による双方向心理教育の展開, 保健医療技術学部論集, **2**, 23-31.
- Kern, R. S., Glynn, S. M., Horan, W. P., Marder, S. R. (2009) Psychosocial treatments to promote functional recovery in schizophrenia. *Schizophrenia bulletin*, **35**(2), 347-361.
- 木村真理子・瀧澤直子・立脇恵子・斉藤あかり (2016) 地域で生活する統合失調症を持つ人の料理活動に関するストレングスの発見: 二人による料理活動に焦点を当てて, *社会福祉*, **57**, 47-63.
- 木村尚美 (2008) 再発を防いでリカバリーを実現する! 心理教育で, 病気を知る, 薬を知る, 対処法を知る, *精神看護*, **11**(6), 60-70.
- 木村幸代・本田優子・五十嵐愛子・加瀬昭彦 (2017) 精神疾患を有する人への「リカバリーゼミ」の実践 参加者の語りからの評価, *創価大学看護学部紀要*, **2**, 1-8.
- 木村貴大 (2016) 精神障害当事者がピアサポーターになる過程: A 氏のライフストーリーから見出されるもの, *北星学園大学大学院論集*, **7**, 1-17.
- 小平朋江・丹羽大輔・いとうたけひこ (2018) メンタルヘルスマガジンの表紙になる: 精神障がい者の自己開示とリカバリー (ビジュアル・ナラティブ: 視覚イメージで語る), *N: ナラティブとケア*, **9**, 82-88.
- 熊倉陽介 (2016) 質問促進パンフレットを用いたリカバリー志向の診療 (特集 リカバリーの脳科学と支援ガイドライン), *精神神経学雑誌*, **118**(10), 757-765.
- Law, H., Morrison, A. P. (2014a) Recovery in psychosis: a Delphi study with experts by experience. *Schizophrenia bulletin*, **40**(6), 1347-1355.
- Lysaker, P. H., Glynn, S. M., Wilkniss, S. M., Silverstein, S. M. (2010) Psychotherapy and recovery from schizophrenia: A review of potential applications and need for future study. *Psychological services*, **7**(2), 75-91.
- Lysaker, P. H., Hamm, J. A., Hasson-Ohayon, I., Pattison, M. L., & Leonhardt, B. L. (2018) Promoting recovery from severe mental illness: Implications from research on metacognition and metacognitive reflection and insight therapy. *World journal of psychiatry*, **8**(1), 1-11.
- MacPherson, M. (2009) Psychological causes of schizophrenia. *Schizophrenia bulletin*, **35**(2), 284-286.
- Morin, L., Franck, N. (2017) Rehabilitation interventions to promote recovery from schizophrenia: a systematic review. *Frontiers in psychiatry*, **8**(100), 1-12.
- 村井俊哉 (2016) リカバリー支援ガイドラインのあり方 (特集 リカバリーの脳科学と支援ガイドライン), *精神神経学雑誌*, **118**(10),

- 766-770.
- Myers, N. L. (2010) Culture, stress and recovery from schizophrenia: Lessons from the field for global mental health. *Culture, Medicine, and Psychiatry*, 34(3), 500-528.
- 成田太一・小林恵子 (2017) 地域で生活する統合失調症患者のリカバリーの概念分析, 日本地域看護学会誌, 20(3), 35-44.
- 夏苺郁子 (2016) 家族・当事者としての経験を通して見たリカバリー, そして精神科医として考えるリカバリーについて (特集 リカバリーの脳科学と支援ガイドライン), 精神神経学雑誌, 118(10), 750-756.
- Neil, S. T., Kilbride, M., Pitt, L., Nothard, S., Welford, M., Sellwood, W., Morrison, A. P. (2009) The questionnaire about the process of recovery (QPR): a measurement tool developed in collaboration with service users. *Psychosis*, 1(2), 145-155.
- 丹羽真一 (2018) リカバリーの時代と SST(生活技能訓練)精神神経学雑誌, 120 (7) ,592-600.
- 野中猛 (2011) リカバリー論からみた統合失調症の予後 (特集 統合失調症の予後改善に向けての新たな戦略), 精神医学, 53(2), 169-175.
- Nowak, I., Waszkiewicz, J., Świtaj, P., Sokół-Szawłowska, M., Anczewska, M. (2017) A qualitative study of the subjective appraisal of recovery among people with lived experience of schizophrenia in Poland. *Psychiatric Quarterly*, 88(3), 435-446.
- 岡本隆寛, 松本浩幸 (2014) 就労を継続する統合失調症者のリカバリー: 働く生活ストーリー当事者の手記より, 日本看護学会論文集, 地域看護, 44, 160-163.
- 岡本隆寛, 広沢正孝, 四方田清, 松本浩幸 (2015) 就労継続支援 B 型事業所を利用する統合失調症者のリカバリーに影響する要因. *Journal of Health Care and Nursing*, 35-43.
- 大崎瑞恵, 大西アリナ, 大井美紀 (2015) 地域で生活する精神障がい者のリカバリーに関する要因分析: 就労継続支援 B 型事業所における参与観察を通して. 精神科看護, 42(1), 57-66.
- Pańczak, A., Pietkiewicz, I. (2016) Work activity in the process of recovery-an interpretive phenomenological analysis of the experiences of people with a schizophrenia spectrum diagnosis. *Psychiatr Pol*, 50(4), 805-826.
- Pitt, L., Kilbride, M., Nothard, S., Welford, M., Morrison, A. P. (2007) Researching recovery from psychosis: a user-led project. *Psychiatric Bulletin*, 31(2), 55-60.
- Ralph, R. O., Kidder, K., Phillips, D. (2000) Can We Measure Recovery?: A Compendium of Recovery and Recovery-related Instruments. *Evaluation Center@HRSI*, 1-121.
- Ridgway, P. (2001) Restorying psychiatric disability: learning from first person recovery narratives. *Psychiatric rehabilitation journal*, 24(4), 335-343.
- Rodgers, B. L. (2000) Concept analysis: an evolutionary view. *Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications*, Philadelphia, PA: Saunders, 77-102.
- Rosen, A., O'Halloran, P. (2014) Recovery entails bridging the multiple realms of best practice: towards a more integrated approach to evidence-based clinical treatment and psychosocial disability support for mental health recovery. *East Asian Archives of Psychiatry*, 24(3), 104-109.
- 佐藤光源 (2008) 統合失調症一病名変更の波及効果と今日的課題, 精神誌, 110, 849-854.

- 佐藤光源 (2013) 統合失調症の治療—症状寛解とリカバリーをめぐる—, 統合失調症, 5, 10-17.
- Scotti, P. (2009) Recovery as discovery. *Schizophrenia bulletin*, 35(5), 844-846.
- 新海朋子・住友雄資 (2018) 精神障害をもつ人のリカバリー概念に関する文献検討, 福岡県立大学人間社会学部紀要, 26(2), 71-85.
- Siu, B. W. M., Ng, B. F. L., Li, V. C. K., Yeung, Y. M., Li, M. K. L., Leung, A. Y. H. (2012) Mental health recovery for psychiatric inpatient services: perceived importance of the elements of recovery. *East Asian Archives of Psychiatry*, 22(2), 39-48.
- 塩見理香・畦地博子 (2016) 地域で生活する精神障がい者のストレスを高めるケアに取り組んでいる看護師の姿勢-6つのテーマに焦点をあてて, 高知女子大学看護学会誌, 41(2), 42-50.
- Spaniol, L., Wewiorski, N. J., Gagne, C., Anthony, W. A. (2002) The process of recovery from schizophrenia. *International Review of psychiatry*, 14(4), 327-336.
- 田中英樹 (2010) リカバリー概念の歴史, 精神科臨床サービス, 10(43), 428-433.
- Thomas, N., Farhall, J., Foley, F., Rossell, S. L., Castle, D., Ladd, E., ... & Frankish, R. (2016a) Randomised controlled trial of a digitally assisted low intensity intervention to promote personal recovery in persisting psychosis: SMART-Therapy study protocol. *BMC psychiatry*, 16(1), 1-12.
- Thomas, N., Farhall, J., Foley, F., Leitan, N. D., Villagonzalo, K. A., Ladd, E., ... & Rossell, S. L. (2016b) Promoting personal recovery in people with persisting psychotic disorders: development and pilot study of a novel digital intervention. *Frontiers in psychiatry*, 7, 1-12.
- 樋端佑樹 (2015) 統合失調症とリカバリー—若手精神科医の体験から, こころの科学, 180, 102-106.
- 辻貴司 (2018) リカバリーへの出立をサポートするデイケア (特集 精神科デイケアの行方), 精神医療, 第4次, 89, 47-55.
- 土屋徹 (2014) 患者さんの希望を社会資源になげる 生活上の困難さを解決するために 毎日の楽しみや生きがいをみつきたい, 統合失調症, 8, 51-60.
- 内野俊郎 (2018) 統合失調症を持つ人へのリカバリー概念に基づいたアプローチ, 正光会医療研究会誌, 15(1), 7-11.
- 内野敬・相川さやか・水野雅文 (2018) 統合失調症の寛解: その定義や疫学を中心に (特集 精神疾患の寛解と再発予防: その実態とは? そして再発をいかに予防するか), 精神科治療学, 33(9), 1031-1036.
- 内山繁樹・加藤大慈・藤田英美・上原久美・武井寛道・佐伯隆史・平安良雄 (2010) 通院中の統合失調症患者への疾病管理とリカバリー (Illness Management and Recovery: IMR) プログラムの実践, 横浜看護学雑誌, 3(1), 39-44.
- 宇田川建 (2008) 2007 世界精神保健会議 in 香港参加印象記, 当事者の分科会で話されたこと, 精神看護, 11(1), 79-81.
- 山口創生・熊倉陽介 (2017) 統合失調症患者における共同意思決定—新しいアプローチとシステム, 医学のあゆみ, 261(10), 941-948.
- Yanos, P. T., Roe, D., Markus, K., Lysaker, P. H. (2008) Pathways between internalized stigma and outcomes related to recovery in schizophrenia spectrum disorders. *Psychiatric Services*, 59(12), 1437-1442.
- Yarborough, B. J. H., Yarborough, M. T., Janoff, S. L., Green, C. A. (2016) Getting by, getting back, and getting on: Matching mental health services to consumers' recovery goals. *Psychiatric rehabilitation*

journal, 39(2), 97-104.

吉見明香・加藤大慈・平安良雄 (2015) IMR で
リカバリー!: EBP ツールキット普及の中で
(創刊 30 周年記念増大号)--(統合失調症治
療の現在) , こころの科学, 180, 22-26.

渡邊由香子・池淵恵美 (2018) 統合失調症の社
会参加: リカバリーに向けて (特集 精神科
リハビリテーションの新たな展開) , 臨床精

神医学, 47(10), 1069-1074.

Whitley, R. (2014) Introducing recovery. *The
Canadian Journal of Psychiatry*, 59(5),
233-235.

Zipursky, R. B., Agid, O. (2015) Recovery, not
progressive deterioration, should be the
expectation in schizophrenia. *World
Psychiatry*, 14(1), 94-96.

A Concept Analysis of Recovery from Schizophrenia

The purpose of this study was to clarify the concept of recovery from schizophrenia. As a result of a search based on the data collection methods, 103 documents were extracted. Five categories were identified in the attributes and named “Accepted by others,” “Accept yourself with schizophrenia,” “Seek your role,” “Feel your independence,” and “Picture an ideal.” Two antecedents were identified and named “Shocked by illness” and “Retrauma experience.” The consequence was extracted and named “Self-Fulfillment.” As a result of the concept analysis, recovery from schizophrenia was defined as follows: “The process of accepting oneself with schizophrenia, seeking a role, and picturing an ideal while feeling one's independence through experiences recognized by others.” Recovery from schizophrenia was formed through the interaction of these five attributes. In addition, the results suggest the importance of two factors for patients with schizophrenia. The first is to recognize and take advantage of the strengths of the patients with schizophrenia. The second is for the people around them to always stay close to and support those patients with schizophrenia. These results clarify that recovery from schizophrenia can be facilitated only by the patient’s efforts and the presence of others.